学生×教職員×地域の編集者が共同編集する ｜ 茨城大学発のフリーペーパー［イバダイバーズ］

茨城大学
Ibaraki University

IBADAIVERS

多彩な者たちが学び、行き交い、探究している茨大のキャンパス。茨大広報学生プロジェクト＆広報・アウトリーチ支援室＆茨城在住の編集者が取材した“イバダイバーズ”の世界、ちょっと覗いてみませんか。

No.5
NOVEMBER 2025

特集

世界の俯瞰的理解の体現に挑む、私たちの現在地。

【特集】
岡倉天心がつくった思索の場、五浦・六角堂で茨大の未来を展望する
茨城大学 学長 太田 寛行
教育学野 准教授 片口 直樹 2

世界と対話する新進研究者たちの、透徹した視座
応用理工学野 助教 大村 高広
教育学野 講師 李 満紅
基礎自然科学野 助教 山下 公子 4

私たちが考える「世界の俯瞰的理解」 7

茨城大学五浦美術文化研究所70周年記念事業
観月会2025講演会
日本画家 手塚 雄二
茨城大学名誉教授 小泉 晋弥 8

【コラム】アカデミアIBADAI
研究に恋して
応用生物学野 助教 迫田 翠 10

戦跡探訪
キャンパス周辺の戦争の記憶 11

【茨大広報学生プロジェクト編集ページ】
全力！茨大サークルライフ！ 12

茨大ほっとステーション 13

先生、ちょっといいですか？
～茨大教員の素顔を調査！～ 14

茨大関連施設にDIVE！ 15

【コラム＆ニュース】
つながるイバダイバーズ
IBADAI NEWS UPDATE 16

表紙写真：瀬能啓太（フォトグラファー／教育学部卒業生） ｜ 撮影場所：六角堂（茨城大学五浦美術文化研究所内）

特集

世界の俯瞰的理解の体現に挑む、私たちの現在地。

岡倉天心がつくった思索の場、五浦・六角堂で茨大の未来を展望する

研究を突き詰めた末に辿り着く、一言で表現できる世界――それを持つことが、「世界の俯瞰的理解」ではないかと思います。 ――太田学長

太田 寛行
茨城大学 学長

1982年東北大学大学院農学研究科博士後期課程修了。農学博士。専門分野は土壌肥料学、微生物生態学。岡山大学歯学部助教授などを経て、97年茨城大学農学部に着任。その後茨城大学農学部長・大学院農学研究科長、茨城大学副学長（大学戦略・IR）、理事・副学長（教育統括）を歴任し、20年4月より学長。

片口 直樹
茨城大学五浦美術文化研究所所長／教育学野 准教授

2002年金沢美術工芸大学美術工芸研究科絵画専攻修了（修士）。高等学校教諭などを経て、09年茨城大学教育学部准教授。22年4月から茨城大学五浦美術文化研究所所長。専門は絵画。洋画家。05年第22回天展 天理ビエンナーレ2005大賞、1999年第20回国際瀧冨士美術賞。

茨城大学における教育の質保証の取り組みに真摯に向き合ってきた太田寛行学長。6年に渡る任期の中で、ディプロマ・ポリシー（学位授与要件、「DP」）の最初に掲げられた「世界の俯瞰的理解」をどのように捉え、その実現にいかに取り組んで来たのか？――五浦の地で東洋と西洋の境界の超克を目指した岡倉天心のビジョンに思いを馳せながら、自身の足跡と茨大の未来について六角堂で語りました。聞き手は茨城大学五浦美術文化研究所の片口直樹所長です。

発明がなければ発見はない

片口直樹准教授／茨城大学五浦美術文化研究所所長（以下：片口）　六角堂の中には初めて入られたそうですね。

太田寛行学長（以下：太田）　五浦には何度も来ていますが、六角堂に入るのは初めてです。インド、中国、それから日本の精神が合わさった天心の思想を建物として表現したものと考えれば、これこそ天心が辿り着いた世界の俯瞰的理解の象徴ではないかと思います。そして太平洋を臨むこの場所に建てたということ。向こうにアメリカ、すなわち自身が勤務したボストンを見て、西洋も東洋もどちらも同じように見続けようとする意図があったのではないかと思いました。

片口　横山大観や菱田春草、下村観山、木村武山といった画家たちも五浦の岸壁で海に向かって絵を描いていました。日本画家の手塚雄二先生もおっしゃっていたのですが、この場所は潮気があって日本画を描くには全然向いていないんですよ。それでも天心が彼らをここに連れてきたというのは、やっぱり何かを伝えるため、教えるためなのだろうと。画家たちに一種の刺激を与える意図もあったかもしれません。太田学長も、地域未来共創学環やスチューデントサクセスセンターの設立など、茨城大学に新しい学びの環境を作り出してきました。教育改革の歩みをどのように振り返りますか？

左）六角堂内部で対話する片口准教授と太田学長。右）敷地内に立つ、天心の横顔と理念を刻んだ石碑の前で。

太田　「発明がなければ発見がない」と、今は思っています。地域未来共創学環のようなものをひとつの「発明」とたとえると、そこで想定もしなかったような学生を「発見」できたというわけです。例えば入学して最初の顔合わせの翌日にSDGsに関するサークルを立ち上げた学生がいたんですね。つまり、それなりの目標をもって新しい仕組みを実際に作ったら、その目標以上の人たちが来る。逆に仕組みを作らなければそういう人たちも来なかったということです。あるいはアントレプレナーシップ教育プログラムを修了した農学部の学生が、自分の目標について「この職業に就きたい」「お金を稼ぎたい」ではなく、「仕事に誇りをもって働きたい」と言うのを聞いたときは衝撃を受けましたね。果たして我々は誇りをもって働いているのかと。そういうマインドをもった学生がプログラムを履修しているというのもまさに「発見」でした。

片口　私も所長という立場になり、新しい仕組みを作り出す困難さに直面しています。太田学長はどのようにして大きな決断をしてきたのですか？

太田　やっぱり時間が必要だと思うんですよ。「スチューデントサクセス」でいえば、ちょうど10年前、アメリカの高等教育の研究会に行ったとき、会場の近くにある大学のキャンパスを散策していて、「スチューデントサクセスセンター」というのを見つけたんです。それ以来「スチューデントサクセスとは何だろう」ということを考え続けていました。その後、共通教育棟の改修というタイミングが来て、「スチューデントサクセス」というコンセプトで施設と組織を作り直すきっかけになったわけです。ですから自分の中に溜めて自問自答する時間というのはやっぱりありますし、現実の行動に出るには環境の変化のようなチャンスが大事だということですね。

片口　そこには一種の創造性がなければ決断すらできないと思うのです。それはある意味芸術表現が成せるもので、天心が訴えたのもそういうことではないでしょうか。この研究所も学生たちにそれを伝える場所でありたいです。

突き詰めてこそ見える世界がある

片口　太田学長は土壌微生物の研究者でもあります。その視点、経験から「世界の俯瞰的理解」をどのように捉えていますか？

太田　大学院から農学部で最終講義を行うまでの研究生活では、「世界の俯瞰的理解」というよりは、「新たに出会った微生物の生き様を知る」というミクロな俯瞰的理解だったと思います。最終講義では、私が出会うことになった5つの微生物の生き方を紹介し、生きざまを語りました。例えば、大学院生のときに新属新種として記載した「アグロモナス・オリゴトロフィカ（AG）」という細菌を一言で総括すると、「A master of soil life, “AG” likes slow life and perfectly independent, but can associate well with different plants」です。

何が言いたいかというと、研究対象を徹底的に調べあげていくと、一言で表現できるフレーズに辿り着くのではないかということです。美術分野で言えば、それが作品ということなのかもしれません。研究の道に触れた人ならば、一生懸命突き詰めていくとパッと見える世界がある。それぞれがそうやって見えた世界をもつということが、「世界の俯瞰的理解」じゃないかと思っています。

片口　我々研究者は自分のもっている世界を俯瞰的に見つめなければいけない、というメッセージとも受け取りました。絵画も追究していくと止まらなくなり、どんどん自分中心になる。そういうときはもう一人の他者の目線を常に必要とします。デッサンでも、対象に集中して細かい表現ばかりしてしまっては結局対象を捉えたことにならず、細密な描写もできないのです。

学長退任後はまた研究者の生活に戻るのですね。

太田　どうでしょうか。学長の仕事に専念するため、論文の査読依頼も一旦はすべて断ったのですが、そうすると自分の専門分野の新しい情報をキャッチアップできなくなってしまう。遠ざかってしまった時間を戻すのは容易なことではありません。自分がやろうとしていることが、今の時代から見てずれているということもあるかもしれません。

学ぶ人たちの多様化に覚悟をもてるか

片口　最後に、茨城大学に今後どのようにあってほしいか、想いをお聞かせください。

太田　2020年に学長になり、コロナ禍で社会がいきなり変わりました。また、大学だけでなく附属学校園の子どもたちやその家族といった方たちへも視野が広がりました。外国にルーツをもつ子どもたちなども含めて、大学や附属学校園に入る人、関わる人は多様化していく。教育や入試が、今年がうまくいったから来年も同じようにうまくいくというふうにはなりません。どういう子どもたちを入れていくかということを、覚悟をもって決め、真剣に教育のあり方を考えられるか。また出口にしても、「博士の数を3倍に」といった一律的で無理な目標を立てるのではなく、地元企業における博士の必要性について大学が間に入って一緒に考えたり、あるいは本当に博士でなければ地域の活性化はできないかといった問いに答えを出していかなければならない。それが茨城大学のような大学がやらないといけないことだと思いますね。

茨城大学五浦美術文化研究所

茨城県北茨城市大津町五浦727-2

美術思想家・岡倉天心（覚三）［1863-1913］は、1905年に現在の北茨城市五浦に六角堂を構え、翌年日本美術院の一部を移転させて横山大観らとともに日本美術の振興や国際的な活動を展開しました。茨城大学五浦美術文化研究所は、六角堂や旧天心邸、長屋門などの文化財を管理するとともに地域の文化・芸術に関する研究・発信に取り組みながら、天心のビジョンを伝え継いでいます。

開館時間：8時30分から（閉館時間は季節により異なります）
休 館 日：原則毎週月曜日（月曜日が祝日の場合はその翌日）
入 場 料：400円（中学生以下無料）

特集

世界の俯瞰的理解
の体現に挑む、私たちの現在地。

世界と対話する新進研究者たちの、透徹した視座

茨大新進研究者３人それぞれの「世界の俯瞰的理解」考。

大村 高広 助教

応用理工学野
工学部都市システム工学科

2020年東京理科大学大学院博士後期課程単位取得満期退学。博士（工学）。23年４月より現職。専門は建築計画、建築構法。

ミクロ・マクロ、内部・外部――異なるスケールで視点を可変させ、地域ごとに存在する「複数の現在」、その「ズレ」を認識する。それこそが創造の源泉になると考えます。

世界でも有数の権威ある国際建築展であるイタリアの「ヴェネチア・ビエンナーレ」。11月23日まで開催していた第19回大会に、応用理工学野／工学部都市システム工学科の大村高広助教が出展作家として選出されました。全体テーマ『インテリジェンス―自然知能、人工知能、共同知能―』を受け、日本館テーマは「中立点（In-Between）」となりました。こうしたテーマを作品に落とし込んだ大村助教は、世界をどのように理解しているのでしょうか。

私は、「世界の俯瞰的理解」を、上空からの「神の視点」を獲得することではなく、自らの視点の限界性を自覚し、その上で多様な視点を往復することで全体像を構築しようと試みる態度として捉えています。この理解の前提となるのが、世界は単一の時間軸で均質化できる対象ではないという認識です。他者や他の地域を自分たちの過去（あるいは未来）のある段階として位置づけてしまうという、進歩史観的な考え方に私は批判的で、むしろ世界には質的に異なる複数の〈現在〉が並存していると考えています。

例えば日本の高度経済成長期にはデジタルインフラがありませんでした。一方ケニアでは、2007年に始まったモバイルマネー「M-PESA」が急速に普及し、金融包摂や経済活動を全く新しいかたちで駆動させています。これは、ある地域が経験する「経済発展」が、歴史の単純な反復ではないことを示す好例です。以上を踏まえた上で、「世界の俯瞰的理解」には２つのポイントがあるというのが、私の考えです。まず、「視点の可変性」。身体や素材といったミクロな視点から、制度や地球環境といったマクロな視点まで、分析のスケールを自在に行き来する能力が必要だと思います。次に「複数の〈現在〉」があるという視点です。地域ごとの時間差や非同期性を理解し、そのズレから何かを学んでいこうという態度が必要だと思います。

世界の複雑性は、単一の視点では決して捉えきれません。ケニアのモバイルマネーの例が示すように、グローバル化は世界を均質にするのではなく、むしろ技術や資本がローカルな文脈と出会うことで、予測不能な新しい現実、つまり多様な〈現在〉を生み出し続けています。この複雑な現実を理解するためには、固定した視点に安住するのではなく、ミクロとマクロ、内部と外部といった異なるスケールを往復する「視点の可変性」が不可欠となります。そもそも私は、他者や異質なものとの「ズレ」や「誤読」こそが、新たな創造性の源泉になると考えています。もし完全な理解や共感が可能であれば、そこに驚きや発見は生まれません。むしろ、理解しきれない他者との対話のなかで生じる予期せぬ応答や解釈の違いにこそ、自らの思考の枠組みを更新し、新しいものを生み出すきっかけが潜んでいる、と考えます。

ヴェネチア・ビエンナーレに出展した作品は、日本館の〈穴〉や〈壁柱〉といった建築要素がそれぞれ人格を持って語り合う「建築演劇」という手法を取りました。これは複数の主観性が交差する状況を表現・再現したもので、ヴェネチア・ビエンナーレはまさに私が考える「世界の俯瞰的理解」を建築というメディアを通して実践的に探求する試みだったと言えます。研究では、例えば自分の家を「手入れ」するというミクロな行為と、環境問題やロジスティクスといったマクロでグローバルな問題がどのように結びついているかを実践的に解明する、といったことをひとつのテーマにしています。これもまた、スケールを行き来しながら世界を理解するというDPの精神と響き合っていると思います。

Research Topic

大村助教が作家として出展。第19回ヴェネチア・ビエンナーレ 日本館展示。

大村助教は、アーティストの藤倉麻子さんとユニットを組み、日本館内部の展示を担当。CG映像、実写映像、補足映像、と３種類の映像を制作した。CG映像は〈穴〉たちが喋ると、その要素が現実化する。実写映像は、５人の男女の食事。５人は時折、左の映像のアクターの会話に反応し、観客側に振り返って反応する。観客には、モノと人間の対話が成立しているように見える。

▶日本館の展示風景（撮影：高野ユリカ）

古典文学の研究は、時空を越えて、世界を俯瞰する目を養います。研究、翻訳を通して、100年後、1000年後の研究者や読者と語り合う。それが私の夢です。

李（り） 満紅（まんほん） 講師

教育学野
教育学部国語選修

2018年早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程修了。博士（文学）。21年茨城大学着任。25年10月より現職。専門は上代日本文学、漢文学。

▲李講師の宝物―平安時代の写本「御物 金沢本万葉集」の復刻版（日本古典文学刊行会）。博士号取得のお祝いに恩師から贈られた。

李満紅講師（教育学野／教育学部国語選修）は、中国江西省南昌市の出身です。専攻は上代日本文学で、現存最古の和歌集である『万葉集』、同じく最古の日本漢詩集『懐風藻』、さらに『古事記』や「風土記」の神話伝説について多くの研究業績を残してきました。上代文学から日中の文化交流や東アジア文化圏の成り立ちを見つめ直す李講師が、国境と時代を超える研究から導く「世界の俯瞰的理解」とは――。

漢詩好きだった父の影響で、幼少の頃より漢詩を聞いて育ちました。幼稚園の頃には杜甫や李白など有名な詩人の作品をいくつも暗唱していたそうです。中国では情報系の勉強をしていましたが、小さい頃から大好きだった文学を学びたいという思いが消えず、また、留学に興味があったので、一念発起して日本に渡り、文学部日本文学科への入学を果たしました。

『万葉集』との出会いは学部１年の時です。その国の文学や文化を学ぶなら原点から始めるべきだと思い、基礎演習という授業での発表テーマに、現存する最古の和歌集を選びました。漢詩とは全く違う文芸様式でしたが、その韻律にはどこか懐かしさもあって、とても魅了されました。『万葉集』と出会うために、日本に呼ばれたような感覚を持ったことを記憶しています。

さて、古典文学と世界の俯瞰的理解がどうつながるのでしょうか。少し例を示してお話ししましょう。『古事記』に載っている「因幡の白兎」の神話は、実はインドネシアから伝わった話です。同じく「コノハナノサクヤヒメ」の神話は「バナナ型」と呼ばれる死の起源神話で、これもインドネシアが源流です。古代の人々は、インドネシアから黒潮の流れに乗って、長い長い年月をかけて日本に辿り着き、文化を運んで来ました。そして、それが現代の我々にまで伝えられているのです。古典にあたると、人や文化の潮流が見えてきて、時間を超越して、この地球が一つにつながっていることがよくわかります。ウタも同じです。文字が生まれる以前から、特別なリズムをもった非日常の言語としてのウタが、世界中にありました。ウタは、神の言葉、或いは神への言葉と信じられていたのかも知れません。言語は異なっても、ウタの原点には、世界人類に共通する心の働きがあったのです。

日本列島は東アジアの最東端に位置しています。中国大陸や朝鮮半島から、またインドネシア方面から、さまざまな文化が流入しては一旦止まる吹き溜まりのような場所です。日本人は、各方面から入ってきた文化を拒否することなく、またただ受け止めるのでもなく、自らの文化として昇華、発展させて来ました。例えば七夕伝説は中国由来ですが、元々は織女（織姫）が牽牛（彦星）に会いに行きます。一方、日本では彦星が織姫に会いに行く形になっています。『万葉集』にも130首あまりの七夕歌がありますが、すでに男女逆転しています。万葉時代の日本では男性が女性の家を訪ねる妻問婚が一般的で、それに合わせて伝説も変容し、だからこそ万葉人たちは七夕伝説に自らの経験を重ね、歌に思いを込めることが出来たのです。

このように古典文学の研究は、国境を越え、時代を越えて、世界を俯瞰する目を養うことにつながるのです。

今、『万葉集』（4516首）の中国語訳に挑戦しています。ただ内容を翻訳するのではなく、和歌としての言葉の力をどう伝えるか、そこに拘りたいと思います。10年単位の難しい仕事になりそうです。何百年も前の『万葉集』の研究書を読んでいると、まるでその時代の研究者と会話しているような感覚になります。私の論文や翻訳を通して、時間と空間を超えて、100年後、1000年後の世界の研究者や読者と語り合う――それが私の夢です。

Research Topic

寿命の起源神話。「石」か「バナナ」か。

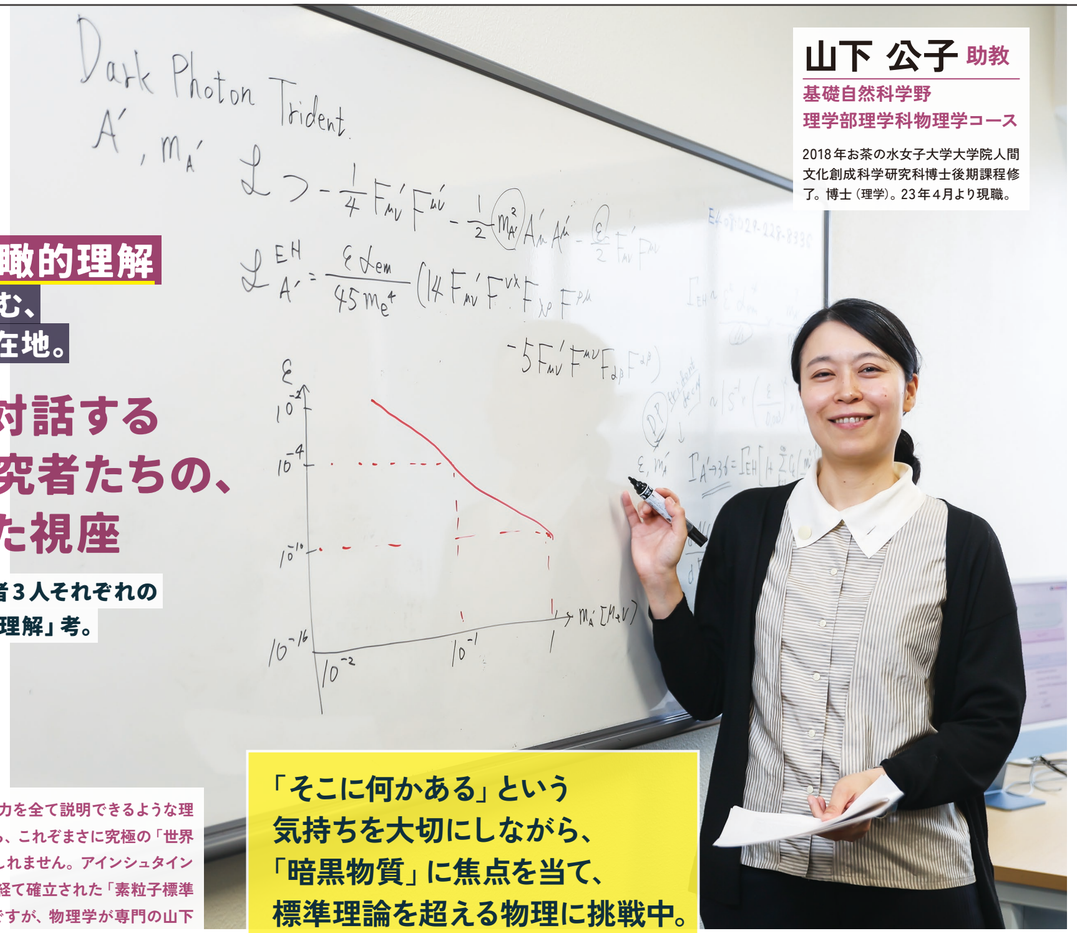
東南アジアを中心に世界各地に伝わる寿命の起源神話。神が人間に「石」と「バナナ」のどちらを選ぶかを問うと、人間は食べられるバナナだけを選んだ。永遠に変わらない石は不死を象徴するが、バナナはやがて枯れ腐るため、人間には寿命が定められたとされる。コノハナノサクヤヒメの神話でも、高天原から地上に降り立った天孫ニニギノミコトが、岩の象徴であるイワナガヒメではなく花のように美しいコノハナノサクヤヒメだけを選んだため、天皇の祖先に寿命が生じたと語られる。

特集

世界の俯瞰的理解の体現に挑む、私たちの現在地。

世界と対話する新進研究者たちの、透徹した視座

茨大新進研究者3人それぞれの「世界の俯瞰的理解」考。



山下 公子 助教

基礎自然科学野
理学部理学科物理学コース

2018年お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科博士後期課程修了。博士（理学）。23年4月より現職。

「そこに何かある」という気持ちを大切にしながら、「暗黒物質」に焦点を当て、標準理論を超える物理に挑戦中。

自然の現象や物質の力を全て説明できるような理論体系が見つかったら、これぞまさに究極の「世界の俯瞰的理解」かもしれません。アインシュタインの相対性理論などを経て確立された「素粒子標準理論」もそのひとつですが、物理学が専門の山下公子助教（基礎自然科学野／理学部理学科物理学コース）はその理論の限界を突破することに挑戦しています。

私の専門は素粒子理論の中でも、加速器を用いた実験や宇宙の観測の結果から理論を導く「現象論」のアプローチです。原子や電子よりも小さな「クォーク」や「レプトン」といった素粒子と、これらの間で力を媒介するゲージボソン、ヒッグスボソンという素粒子から構築された「素粒子標準理論」は、最もメジャーな理論で実験からも高い精度で検証されています。

ところがいくつもの事実から素粒子標準理論の限界も示唆されています。例えば実験で確かめられたニュートリノ質量を説明するためには、理論の拡張が必要です。それから直接検出はできていないけれど、観測から質量があるとされる「暗黒物質（ダークマター）」の存在も説明しきれません。私は今、この暗黒物質に焦点を当てて標準理論を超える物理に挑戦しています。

中学や高校で習うような万有引力の法則も、実は素粒子標準理論にうまく位置付いていません。「超ひも理論」を使って量子的に説明できそうなので、その最新の研究と私たちのような現象論との間でもっとコミュニケーションができれば、標準理論を超える物理により接近できると思っています。その意味で分野を超えた共同研究は大事ですよね。

私は修士2年のとき、「リーディング大学院」という事業でアメリカとフランスにそれぞれ4か月と6か月の短期留学をしました。リーディング大学院では学際的な研究課題に取り組みます。私たちのプロジェクトは生物・数学・数理物理・物理の研究者をメンバーとするもので、私はアメリカのバージニア工科大学に滞在して、皮膚細胞の集団運動を数理モデルでシミュレーションする研究に従事しました。博士修了後のポストをめぐっては、世界中の大学や研究機関に50件以上応募してかなり苦労しましたが、縁あって台湾の大学のプロジェクトに加わることができ、その後は中国、韓国でも研究員を務めました。各地での素晴らしい先生たちとの出会いを通じて研究のアプローチは大きく広がりました。

学生たちにも、自分自身が関心をもった分野を追究してほしいです。私自身が各地を転々とした分、その学生の興味にあった研究コミュニティを世界の中から見つけて紹介することができると思います。一方、自分とは全然異なるタイプの人がいるという事実を理解することが大切かもしれません。適度な距離を置いて人間関係をとらえることで、ストレスを感じずにやりたいことに飛び込んでいけることもあります。これも一種の「世界の俯瞰的理解」でしょうか。

素粒子標準理論は学部4年間ではなかなか理解しきれず、修士での学びや研究を通じてようやく全貌が見えてきて、その先に新たな視野が開けてくるようなもの。私自身も「そこに何かある」という気持ちを大切にしながら、展望を開いていけたらと思います。

Research Topic

暗黒物質（ダークマター）

宇宙をめぐっては、直接検出はされていないが質量や重力をもつ「暗黒物質（ダークマター）」があると仮定されている。ダークマターが本当にあるのか、正体が何なのかは、これまでも観測器実験やブラックホール研究などを通じて探究されているものの、分かっていない。その存在は素粒子標準理論の限界を示すものであることから、暗黒物質の研究の先には新たな理論の構築につながる可能性も秘められている。

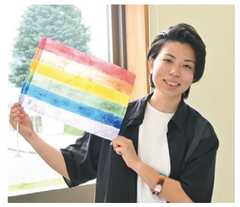
茨城大学量子線科学国際シンポジウムのため来日した Kingman Cheung教授（右）と。

特集

世界の俯瞰的理解の体現に挑む、私たちの現在地。

私たちが考える「世界の俯瞰的理解」

学生たちは、「世界の俯瞰的理解」をどのように捉えているのでしょうか。5人の学生に話を聞きました。



“非当事者”の反応も確認しながら物事を多角的に判断し、LGBTQ＋への支援や理解を広げたい。

人文社会科学部現代社会学科1年
西尾 香澄さん

小学生のころから、既存のジェンダー観への疑問がありました。大学ではLGBTQ＋支援サークル「Lib[a→e]ra（リベーラ）」を作りました。学内でレインボーフラッグが見当たらなかったので、みんなで作ってオープンキャンパスで飾りました。小さなことですが、「向き合う姿勢」を示したかったんです。

LGBTQ＋の課題を軸に世界を見ているので、偏りがあることは自覚しています。だからこそ、関連ニュースの“非当事者”の反応を確認するようにしています。当事者の考えと相反することも多いですが、物事を多角的に見て判断したいという思いが強いです。

以前は、少数派は後回しになりがちで、「ここにもいる」と示さないと支援や理解は進まないと考えていました。けれど大学に入り、支援を求めることでかえって偏見が強まると考える当事者に出会い、視野が広がりました。性自認や性的指向を公にしていない人たちの権利をどう守るのかも、考えていかなければなりません。

楽しい聾学校時代を経て“普通”の環境に身を置き、苦労や失敗を重ねた自分だからできること。

理学部理学科数学・情報数理コース4年
朝比奈 慎一郎さん

高校まで聾学校で過ごし、楽しいことばかりでした。大学で初めて“普通”の環境に身を置いたとき、つらいことがたくさんありました。聾者ばかりの大学なら楽しいことだけ続いたかもしれないという思いは今でもあります。ただ、健聴者の世界で一人暮らしをして、世の中楽しいことばかりではないと気づいたことは、大きな学びになりました。サポートしてくれる方々に出会えたこともうれしかったです。唯一、障害があって良かったと思えることです。

数学の先生を目指してきましたが、今は特別支援、特に聾学校の先生になりたいと考えています。僕は、聾者の世界から健聴の世界への“留学”につまずいてしまった部分があります。だからこそ、自分の経験をできるだけ詳しく伝えて、社会で苦しまないようにしてあげたいです。特に、聾学校時代から、聾者だけで集まるのではなく、色々な人と交流して欲しいです。自分の世界を少しでも広げておくことが、将来につながると考えています。

フェアトレードコーヒー豆を使ったドリップバッグの制作販売を通じて、SDGsの重要性を伝えていく。

地域未来共創学環2年
前神 夏音さん

SDGsサークル「Linking」の共同代表をしています。このサークルでは「好きなことを通して課題解決に取り組む」ことを目指し、4つの部門に分かれて活動しています。私はコーヒーが好きで、フェアトレードの啓発活動をしています。地域の焙煎所と協力して作ったドリップバッグは、売上の一部が現地の学校建設費などに充てられる仕組みで、イベントでも販売しています。一つの消費行動が遠く離れた誰かのためになることを伝えられるとうれしいです。

SDGsは中学3年生のとき、公民の教科書のコラムで知りました。「2030年に達成すべき目標が、こんなに知られていなくていいの？」と疑問を持ちました。しかし今では誰もが知っている言葉になり、“古い”と言われることさえあります。たった数年で求められることもアプローチの仕方も変わり、そのスピードのすさまじさを感じます。目標の達成だけでなく、その過程で何を学び、どう変化を続けるかが大切だと思います。

世界を変える力はみんなの協力によって生まれるもの。

理工学研究科博士後期課程2年
インドネシア出身
Sahlan Ramadhanさん

ムスリムとして、この世界は神さまから人間に託されたものであるから、人間はできるだけ大切に扱うべきだと考えています。一方で、理学は世界の人々の発展のためにあるとも考えています。

理想は色々な人がお互いを理解し合う、戦争も差別もない世界。日本人にイスラム教は理解してもらえないと思っていましたが、大学にPrayer roomがあったり、バイト先で豚肉に触らないことを許してもらえたり妻のヒジャブを受け入れてもらえたり、優しくしてもらえました。相手への思いやりを持つことを自分から始めて、身の回りの人に行動で表すことで、広がっていくと良いと思います。そして、世界を変えられる力は、みんなで協力することで生まれると考えています。

専門は電波天文学で、星形成のプロセスについて研究しています。将来のことは未定ですが、天文学で日本とインドネシアをつなぐような存在になりたいです。

自転車で日本全市制覇に挑戦中！ 良いことも悪いことも起こることすべてに意味がある。

教育学部社会選修4年
髙澤 侑二朗さん

自転車で日本の全市制覇を目指しています。各市で一番気になるところに必ず行くことにしていて、全国792市のうち364市を回りました。

市ではありませんが、1番印象に残っているのは、北海道・手売島です。人口250人ほどの小さな島で、1か月滞在しました。所持金が少なくなってしまって、近くにいた方に仕事の相談をしたら、観光案内所や漁業協同組合で働かせてもらえて、名前も知らない僕にすごく良くしてくれました。恩返しではないですが、僕も色々なところで天売島の宣伝をしています。そういう積み重ねが地方創生にもなると思っています。旅の途中、交通事故で死にかけたこともありました。それから「生き残った意味」を考え続けて、その時々で意味を付けるのがいいな、という考えに落ち着きました。良いことも悪いことも、それが自分に何を教えてくれたかを考える。そうすると、この世の中すべてが、答えを教えてくれる先生のように思えます。

茨城大学五浦美術文化研究所
70周年記念事業

観月会2025 講演会

クロストーク 日本美術院の系譜 ―五浦で岡倉天心を語る―

2025年6月21日（土）14時→15時
茨城県天心記念五浦美術館 講堂（北茨城市）
主催：茨城大学五浦美術文化研究所
司会：片口直樹（茨城大学五浦美術文化研究所所長）

日本画家
手塚 雄二

てづか ゆうじ ●1953年神奈川県生まれ。東京藝術大学大学院美術研究科修了。2019年度まで東京藝術大学教授。東京藝術大学名誉教授。日本美術院同人・業務執行理事。福井県立美術館（Fukui Fine Arts Museum）特別館長。東京都美術館運営委員。台東区藝術文化財団理事。

×

茨城大学名誉教授
小泉 晋弥

こいずみ しんや●1953年福島県生まれ。東京藝術大学大学院美術研究科修了。2019年度まで茨城大学教育学部教授。2022年より茨城県天心記念五浦美術館長。茨城大学名誉教授。美術評論家連盟会員。美術史学会会員。文化資源学会会員。茨城地方史研究会員。

茨城大学五浦美術文化研究所は、6月21日（土）、茨城県天心記念五浦美術館で、「観月会2025講演会」を開催しました。日本美術院同人であり福井県立美術館特別館長の手塚雄二氏と、茨城県天心記念五浦美術館長で茨城大学名誉教授の小泉晋弥氏が、「日本美術院の系譜―五浦で岡倉天心を語る―」をテーマに対談。手塚氏の師である平山郁夫氏（1930年→2009年）などを巡るエピソードなど、同い年でもある二人のトークで、会場は笑いの渦に包まれました。

30代で日本美術の血脈図を描いた平山郁夫の根性

小泉晋弥氏（以下、小泉） 五浦美術文化研究所所蔵の、平山郁夫先生の《日本美術院血脈図》があります。この絵で平山先生は白い服を着た岡倉天心を描いてます。天心が実際に着ていた東京美術学校の教員服は海老茶色ですから、それを白い服にしたというのは、平山先生が天心を神のように描きたかったということではないでしょうか。平山先生の一番弟子とも言われる手塚先生に、平山先生が岡倉天心をどう捉えていたかということをまずは伺いたいです。

手塚雄二氏（以下、手塚） 平山先生がこの絵を院展に発表したのは30代のとき、同人になられてまだ早い段階なんですよ。平山先生の先生である前田青邨（せいそん）がいて、その先生の横山大観がいて、そして天心が描かれている。この血脈図を同人になりたてのときに描くという根性は半端じゃないですよね。我こそが院展を支えていくんだと思っているんですよ（笑）。まさか平山先生は自分も岡倉天心のようになりたいと思っていたんでしょうかね。

小泉 私はそう思っていたと見ています。

手塚 そうですか？ 大谷翔平が自分の夢を紙に書いて叶えたように、平山先生も東京藝大の助教授のときからそのうち教授になって学長になって…なんて、当時から考えていたんですかね？

小泉 私はあったと思いますよ、それぐらいの自負心が。私、この絵を毎年のように見ながら平山先生本人がどこにいるかずっと探しているんですけど、未だにわからないんですよ。

手塚 描きますか？ 自分を？ ラファエロみたいに？

小泉 岡倉天心という人は、何歳のときにこれをやるんだという形で人生設計ノートを書いています。「文

平山郁夫《日本美術院血脈図》1965年
（茨城大学五浦美術文化研究所所蔵）

部大臣になる」とまで書いてある。東京帝国大学に入った15～16歳のときに人生設計が終わってるんです。その天心を目指しているんだから、平山先生が自身を描いていてもおかしくないですよ。

天心は、横山大観や菱田春草を五浦に住まわせ、絵を描かせた

手塚 岡倉天心先生は、横山大観とか菱田春草とかに、家族を連れてここ（五浦）で暮らしなさい、ここで絵を描きなさいと言った。絵描きからしたらたまったもんじゃないですが（笑）。ここで天心はどういう指導をしたのでしょうか。

小泉 当時日本美術院で「日本美術」という雑誌を出していて、互評会の速記録が残っています。そこで画家同士は名前を呼捨てで呼び合っているのに、天心は全員を「さん」付けにする。言葉遣いも丁寧で。全員に平等に接しているんです。そして人の絵をあまり否定しない。

五浦に来ることになった4人の画家たちが当時のエピソードを語っていて、大観が一番不満を言っているんですね。自分が描いた下絵を全部積んで持っていくと、天心が一番上のものだけ見て「それがいい」と言って返してくる。でも下村観山には手取り足取り指導する。下村観山の場合はいっぱい言わないと絵がまとまらないんですね。一方で大観は規格外だから、好きにやらせておけばいい。天心は一人一人の画家の力を伸ばすためにはどうしたらいいか、相手に合わせて言葉を変えていたんだろうと。

手塚 それは大観の嫉妬ですよね。でも天心が大観を一番に考えていたということでしょうね。

小泉 私もそう思います。菱田春草に対する態度なんかも、なるほどなと思いますよ。春草が若くして亡くなった後、天心は、春草の魅力は未熟だったところ、完成していないところだったと言っている。どういうことなんだろうと思っていたのですが、さきほど楽屋で手塚先生と話していて気付きました。

例えば春草の《落葉》という絵。パートは完璧に完成しているんだけど、絵の前に立ったときにどこを見たらいいかわからない。テーマは見る人が作ってよ、という絵なんですよね。未完成の状態で置いてある。岡倉天心の批評の仕方もそれに似ているんじゃないでしょうか。ぼんやりとこの絵はこういうことだよねと言うと、聞いた人は自分で考えて作り上げないといけない。それが天心の画家に対するスタンスだったんじゃないでしょうか。

作家の背中を見せればいい。天心と平山に共通する信念。

手塚 絵の中の物事をわかりやすく説明したところで、作家の心には響かない。天心の言葉は漢詩のように美しく、その美しさをもって絵の奥の話をすると、画家はなんとなくわかった気になる。それが心が通ずるということで、そうやって人の心の中に染み入っていくのが天心先生の指導だったと思うんです。

平山先生はというと、学生が卒業して院展に出品するようになると、下図を先生に見せますね。すると、「ん―……おやんなさい」と言うんです。「おやんなさい」と「ん―……おやんなさい」はえらい違いなんです。「ん―……」はやり直せという意味。言葉の雰囲気ですよね。

後に私が賞を取ったときに、平山先生が藝大に来られて、絵の途中を見てもらったんです。指導してもらえると思うじゃないですか。それが、先生は「君ね、これ、横は何センチだ？」って言うんですよ。「僕はね、これよりも大きい絵を描いてんだ。じゃ、そういうことだから」といって出て行っちゃう（笑）。そのときに「やった！」と思いましたよ。これは褒めているんだと。どう思いますか？

小泉 天心先生と同じだと思いますね。

手塚 え？ 同じですか！？ 美しい言葉と同じ？

小泉 言葉にまとわりつく空気とかニュアンスがあって、その場にいないと天心の言葉はわからないんですよ。絶対そうです。天心は英語をネイティブレベルで話せたのに、インドで若者たちに話をしたとき、ポツリポツリと話していたという証言が残っています。「ん―……おやんなさい」と同じですよ。

手塚 私も教員になるとき、平山先生に、絵描きが絵描きにどうやって絵を教えればいいか聞いたんですよ。そしたら、「君ね、絵は教えちゃだめ。余計なことを言わず作家の背中を見せなさい。いい仕事をしていれば絵が人を育てる。背中を見せろ」と。

小泉 それは天心が東京美術学校で高村光雲に言った言葉と一緒ですよ！ 光雲は武士だから学校でどう教えればいいのかわからない。それに対して天心は「作っていればいいんです。背中を見せればいい」と。平山先生はそれを知っていたのでしょう。

手塚雄二《霞野》

五浦美術文化研究所の70年と平山郁夫の存在。

小泉 私は茨城大学の教員として五浦美術文化研究所・六角堂の運営に関わっていて、30年ほど前「岡倉天心と五浦」という本を出したんですね。大学は今も昔もお金がないので、当時平山郁夫先生に相談したら、ポケットマネーで2000万円を出してくださった！ 本を1冊つくっても費用は50万円ぐらいですから、お金はなかなか使いきらなかったのですが、今年か来年でようやく使いきります。私はもともと天心の研究はしていなかったので、最初は平櫛田中のことを書いてごまかしたんです（笑）。でも最後に天心のことをちゃんと書くことができた。岡倉天心と平山先生のおかげで70周年を迎えられました。ありがとうございます。

手塚 その話は初めて聞きましたね。平山先生が亡くなる半年前ぐらいに電話があったんです。「君、やってるかい」って。それで「一生懸命やってます」と答えたら、「君ね、まだまだだよ」って。それで先生は、「僕は君ぐらいの年にこういうことをした」といったことを話したのですが、寄附の話は一切なかったですよ。

小泉 やっぱり平山先生は20世紀の天心を目指していたんじゃないかと、私は薄々思っています。

線を捨てて形を極める朦朧体 日本の美学の根底にある「あわい」を表す

小泉 今回の院展（再興第109回院展 茨城五浦展）の最初に、手塚先生の《霞野》という作品が置いてある。これ、朦朧体ですよね、って聞いたら、「ああ、そうだ」って…。

手塚 この話の流れでそれを言ったら、私がすごい嫌な奴みたいじゃないですか（笑）。

小泉 最近、松岡正剛の「フラジャイル 弱さからの出発」を読み直していて、日本文化の根本は弱さ、あるいは壊れやすさ、何かと何かの間、すなわち「あわい」にあることを改めて認識しました。油絵みたいに完成した強さではなくて、何かと何かのちょうど中間にあり、どちらの構成も受け入れられる柔軟さ。それがヨーロッパからは弱さに見えるわけですが、それが日本の美学にとってはいかに大事か。天心もじつは弱い人なんです。天心がインドのプリヤンバダ・デーヴィーに宛てた手紙に、私はあなたの膝に顔をうずめて泣きたいと書いてある。弱さを持っているのが天心の奥深さなんです。

朦朧体も、線を捨てている。そこにモノがあるよと線で示すと強くなっちゃう。手塚先生の絵を見ると、雀が飛んでいて空間があるんだけど、何を描いているのか、春草の《落葉》と一緒でわからない。朦朧体から落葉につながっていく春草の未完成性と同じ匂いを、先生の《霞野》の作品に感じました。その感覚が正しいかどうかは、ぜひ作品を見てください。

手塚 みなさんわかりました（笑）？ 絵は、よく見て、感じてもらうということなんです。朦朧体って、線じゃないからこそ、ものすごく形にこだわっている。煙でも大気でも、その形が美しくないと絵として成立しない。極限まで形を突き詰めていった上での朦朧体なんですよ。そう思って描いたので、この形はおかしいよと思ったら、みなさんぜひ美術館に投書してください（笑）。

茨城大学五浦美術文化研究所 70周年記念事業

11月の観月会2025では、手塚雄二氏が蒔絵を施した茶器「棗」や、六角堂の「スケッチ」などを展示しました。そのほか、茨城大学図書館本館での木村武山展（2026年2月予定）や、六角堂を赤色顔料「ベンガラ」彩色し創建当時の姿に蘇らせる事業、クラウドファンディングを活用した「長屋門」屋根葺き替え事業を行います。クラウドファンディングは12/23まで。詳しくは大学HPへ。

ACADEMIA IBADAI

知のプラットフォームとしての
茨大のよりディープな側面を、
さまざまな視点からご紹介します。

COLUMN

研究に恋して

応用生物学野 助教 **迫田 翠**

茨大生として取り組み始めた研究が
世界の耳目を集める発見へと展開。
食料危機と気候危機、2つの課題解決に
つながる微生物を追い、今日も圃場に立つ。

体長わずか2ミクロンの微生物との出会いが、人生を大きく変えることがある。

応用生物学野の迫田翠助教は、茨城大学の卒業生だ。修士・博士課程も阿見キャンパスで過ごし、博士号取得後に教員のポストを得た。北海道生まれ、茨城県龍ケ崎市育ち。母親やペットの影響もあって動物に興味を持ち、高校時代の得意科目も生物。人の役に立つ応用的な研究をしたいと思い、農学部進学を選んだ。

入学当初は遺伝子組換え技術に関心があったが、学部2年生のときに受講した持続可能な農業をテーマにしたオムニバス授業が迫田の意識を変えた。「遺伝子組換えなどで新しいものを生み出すより、今ある資源にまだまだ素晴らしいものがあって、それを生かしてどうやって持続可能性を考えるかということに目が向くようになりました」。

その後、西澤智康准教授（現教授）の研究室に配属され、土壌微生物学の世界へ足を踏み入れることとなった。

「微生物を利用して農業の環境負荷の低減を目指しているところが私の興味に合っていると感じたんです」。この時期西澤は、「KH32C」と名付けられた微生物に注目しはじめていた。イネの根の表面にくっついて成長を促す機能をもち、さらに環境汚染物質の一酸化二窒素を減らす脱窒作用ももつ。迫田もその研究に取り組むこととなった。

その頃、微生物研究の分野でも気候変動対策への関心が高まりつつあった。「肥料なしでよく育つとしても、温室効果ガスの発生も増えてしまっては仕方ないよね。調べてみよう」。持続可能な農業と微生物の関係を探究してきた西澤が、迫田に水田のメタン測定の課題を示したのも必然だった。

メタンは農業の生産過程で必ず発生する物質だが、同量の二酸化炭素の約27倍もの温室効果をもつ。そのため世界中でその抑制のための研究が取り組まれており、メタンを直接分解する微生物もたくさん報告されている。しかしそれらを土壌に移しても、思うようにはメタンは減らない。あるいは作用が強すぎて土壌の生態環境自体が変わり、生産が持続不可能になってしまう。

「KH32Cがメタン発生に対して影響するなんて正直考えていませんでした」と迫田。ところが予備試験で水田からのメタンの発生が約2割減少していることが確認された。「最初は間違いかと思った」が、その後の正式な試験でもほぼ同じ結果に。KH32Cは、作物の成長促進とメタン抑制の「二刀流」微生物である可能性が示された。

「実験室での研究が好きでしたが、圃場の実験は手間がかかるから苦手だったんです」と言う迫田だが、もはや進むしかない。他の機関へ、農地の温室効果ガスの測定方法を学ぶ「修行」に出向き、「苦手」な圃場実験に果敢に取り組んだ。5期間にわけて54のサンプルを採取。1回の圃場実験で扱うサンプル数としてはかなりの数だ。わかってきたのは、土壌中のメタン生成古細菌（Methanogen）の働きが低下し、メタン酸化細菌（Methanotroph）が活性化するという変化があるらしいということ。しかもKH32C自身は土壌に残らず、環境への影響も少ない。迫田はその成果を博士論文にまとめ、西澤らとともに査読論文として発表。食糧危機と気候危機の2つの課題に貢献する微生物の存在を、世界に初めて示した瞬間だった。

KH32Cとの出会いから数年後、迫田は茨城大学の教員となり、話はさらに大きく展開する。ある日、西澤教授のもとに届いた一通のメール。それは、マイクロソフトの創業者であるビル・ゲイツ氏が当時の妻と設立した現・ゲイツ財団からのものだった。財団は食糧問題と気候変動の解決に資する研究を探しており、迫田らの論文に注目。日本円で約5億円という大規模な助成のオファーとともに、インドとコロンビアの研究者との協力を提案された。「まだしばらく国内でエビデンスを積み上げるつもりが、いきなり国際プロジェクトになっちゃったんです」と迫田は語る。

インドのような人口の多い地域でKH32Cのメタン抑制効果が証明されたら、相当なインパクトだ。世界の農業分野からの温暖化対策に貢献できる。

「KH32Cを接種したイネを育てる水田のメタン排出を初めて測定したとき、もし減少が確認されなかったら、私の人生は全く違ったものになっていたと思います」。

かつては苦手にしていた圃場に今は積極的に立つ迫田助教。師であり同僚となった西澤教授とともに、地球規模の課題に挑んでいる。

上）阿見キャンパスに隣接する広大な圃場の中一角に迫田助教の実験圃場もある。下左）研究室で取材に応じる迫田助教。下右）研究室の学生と。稲の実を穂から取り外し成分を計測する。

PROFILE

迫田 翠（さこだ・みどり）

2017年茨城大学農学部卒業。2019年茨城大学大学院農学研究科修士課程、2023年東京農工大学大学院連合農学研究科博士課程をそれぞれ修了。博士（農学）。専門は環境農学。農学部では地域総合農学科の教員として「作物学」などの授業科目を担当。「子どもの頃から習っていた琴を最近また弾くようになりました」

COLUMN

戦跡探訪

キャンパス周辺の戦争の記憶

戦後80年という節目の今年。
茨城大学のキャンパス周辺に今も残る
戦跡を訪ねながら、大学と地域に刻まれた
戦争の記憶を辿りました。

1 軍旗掲揚台 課業が始まると、ラッパの音とともに軍艦旗が掲げられていた。現在は基部と支持金具のみが残る。**2 方位盤** 海軍飛行予科練習生（予科練）たちが、自分の位置や方位、風向きなどを把握するために使用していた。**3 海軍航空殉職者慰霊塔** 阿見キャンパスから徒歩数分の場所にある慰霊塔。全国の海軍航空隊で訓練中に亡くなった5573人の慰霊を目的とする。**4 茨大通り（海軍道路）** 阿見キャンパスの西側を南北に走る通称「茨大通り」。もともとは、旧海軍の航空隊にあった陸上班と水上班を結ぶ道として整備されたもので、当時は「海軍道路」と呼ばれていた。

阿見

霞ヶ浦海軍航空隊本部の面影が色濃く残る

茨城大学阿見キャンパスがある一帯は、霞ヶ浦湖岸の高台に広がる平坦な野原が飛行場の建設に適していたため、旧海軍の航空隊本部が置かれました。キャンパス内には、当時の面影を伝えるコンクリート製の「方位盤」や「軍旗掲揚台」などが残されています。

1 水戸歩兵部隊の跡 堀原運動公園ふれあいの広場に建つ石碑。**2 水戸工兵隊跡** 茨城大学教育学部附属中学校近くの石碑。茨城大学の学生たちが、水戸キャンパス周辺の戦跡を調査し、水戸キャンパス講堂で行われた映画「ペリリュー ―楽園のゲルニカ―」先行試写会で調査報告を行った。

水戸

水戸歩兵第二連隊の兵営跡地

茨城大学水戸キャンパスは、陸軍水戸歩兵第二連隊の兵営跡地につくられました。また、教育学部附属中学校は、水戸工兵隊跡地に立地しています。水戸歩兵第二連隊は、シベリア出兵や満州事変、日中戦争等への出征を経て、太平洋戦争末期、パラオのペリリュー島に上陸し、多くの兵士が戦死しました。

日立

米軍の艦砲射撃による犠牲者を悼む慰霊碑

茨城大学工学部の前身である多賀工業専門学校の校長官舎と吼洋寮が米軍の艦砲射撃を受け、校長・職員と学生14名が犠牲となりました。吼洋寮敷地内には、殉難者と卒業生戦没者の名を記した慰霊碑があります。

茨城大学広報紙「イバダイバーズ」の後半（P.12～P.15）では、茨大広報学生プロジェクトのメンバーによる記事をお届けします。
現役の茨大生たちが、自分たちが発信したいテーマについて議論し、自ら取材をしてつくりあげた記事をお楽しみください。

全力！茨大サークルライフ！

サークル・部活動で輝く茨大生たちにインタビュー！

このコーナーでは、「大学ならでは」のサークル活動や部活動に熱中する茨大生に注目！ 空へ、馬上へ、そしてサーキットへ――今回は“のりもの”特集。熱気球同好会を中心に、馬術部、フォーミュラ部の方に話を聞きました。

Rio Kimura　Yuna Masuda　Momoka Inoue　Yukino Miwa

地上1000mの世界で“非日常”を体感する！

熱気球同好会

主に週末の早朝から栃木県栃木市で気球を飛ばしているという熱気球同好会。メインパイロットとして気球を操縦するほか、主催イベントの幹事や大会へのエントリーなどたくさんの仕事を担う高島健太さん（3年）に話を伺いました！

初めてパイロットとして気球を飛ばしたときは、どんな気持ちでしたか？

高島　初めて離陸したときは、自分の乗っている籠が宙に浮く感覚がちょっと怖かったのですが、気球は空中でもけっこう安定しているので、怖さはすぐになくなりました。浮いていくにつれて、人や車がどんどん小さくなっていくのが面白かったですね。

唐突ですが、高所恐怖症の人がフライトするのは難しいですか？

高島　難しいかもしれないけれど、ただある程度まで上がったら感覚的にはもう同じなんですよ。1000mぐらいまで上がる間はどんどん人や車が小さくなっていくので「あ、高いな」ってわかるんですけど、それ以上行くと人も建物も小さすぎて、どのくらい高いのかもよくわからなくなってくる。なので、高所恐怖症でも大丈夫な人もたぶんいると思いますよ。

フライトの最初だけ少し怖いんですね。

高島　最初は怖いと思いますね。中途半端にちょっと浮いているくらいのときが一番怖いですね。スカイツリーくらいの高さにはすぐに到達してしまうんです。だから、気球をやってる人は、高さの感覚がちょっと変になってると思いますね。

何分くらいで1000mまで行けますか？

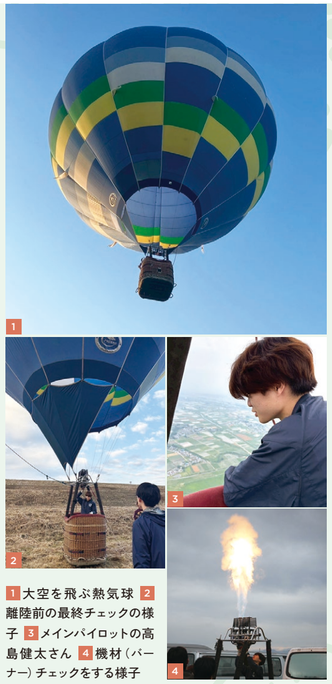
高島　1分くらいですぐに上昇しきってしまいます。逆にそのくらい早く上げないと風がなくなってしまうこともあるので。上下動はかなり激しめです。

風とにらめっこしながら飛ばす瞬間を見極めているんですね。

高島　そうですね。風って地上が一番弱くて上に行けば行くほど強いんです。風は目に見えないので「今、変わった」とはわかりづらいんですけど、一緒に飛んでいる他の気球が行きたい方向に動いていると、「じゃあの風を使おう」と考えます。気球を下げる時もけっこうスピードを出して下げますね。ジェットコースターに乗った時のふわっと浮遊感があるあの感じで下がる時もたまにあります。

熱気球同好会の一番の魅力は何でしょうか？

高島　非日常を体験できるのが、このサークルの一番の魅力。気球を触ったり、実際に自分がパイロットになって気球を飛ばしたりするなど、日常ではできないような体験ができることですね。それ以外にも、みんなで車に乗ってわいわい話しながら移動したり、旅行に行って一緒に泊まったりとか。ある意味大学生らしくて、なおかつ、このサークルに入らないとできないようなことをたくさん体験できるのが、熱気球同好会のいいところだなと思います。



1大空を飛ぶ熱気球 2離陸前の最終チェックの様子 3メインパイロットの高島健太さん 4機材（バーナー）チェックをする様子

熱気球にロマンを感じる取材でした。大学で新たなことを始めたい方にお勧めのサークルです！

INFORMATION

部員数：60名／1988年発足

問い合わせ　インスタグラムにご連絡ください。
@iu_balloon

馬中心の生活でスキルを磨く

馬術部

農学部3年
日髙 生真さん

私たち馬術部は、大会への出場を目標に活動しています。乗馬クラブと異なり、私たちは大学や地域の方、獣医さんや装蹄師さんなど多くの人に支えてもらいながら、馬の管理をほぼ自分たちの手で行っています。騎乗のほか、馬の手入れ、飼付け、馬房掃除などの活動を毎日当番制で行い、馬中心の生活を送っています。大変な面もありますが、その分馬が懐いてくれて愛着を抱きます。乗馬スキルを磨き大会にも挑戦していて、成長を実感できた際には大きな喜びを感じます！

部員数：馬6頭、猫1匹、
部員18名／1955年発足

問い合わせ　インスタグラムまたはXにご連絡ください。
@ibadaibajutsubu

自作のフォーミュラカーで走行！

フォーミュラ部

理工学研究科
博士前期課程1年
柴田 紗里奈さん

フォーミュラカーの設計・製作・走行を、日立市を中心に多くの企業からの支援を受け、学生のみで行っています。主に日立キャンパスで活動していて、2025年の全国大会では、ICV部門で総合8位を獲得しました。私はものづくりが好きで、物質科学工学科の西野先生の授業の中で部の存在を知り入部。すっかり魅力にはまり、現在は部長として活動に全力を注いでいます。

部員数：28名
2004年発足

問い合わせ　インスタグラムまたはXにご連絡ください。
ibaraki_university_racing　@I_U_Racing

取材・文：木村莉緒（教育学部2年）、増田夕奈（人文社会科学部2年）、井上桃歌（人文社会科学部2年）、三輪優季乃（人文社会科学部2年）
イラストレーション（P.12-P.15）：太田玲美（人文社会科学部2年）

茨大ほっとステーション

茨大生の暮らしを支える熱血茨大サポーターズをご紹介！

私たち茨大生の生活を支えてくれている学内外のさまざまな人物にインタビュー。
茨大生との関わりや想いなどを伺いました。

Yuna Masuda　Maki Kido　Tomohiro Onuki　Momoka Inoue　Riko Shimotome

茨大生の安全で快適な通学を多角的に支援。

茨城交通株式会社 本社

SHOP DATA　茨城県水戸市袴塚3丁目5-36

茨城交通バスの本社を訪ね、茨大生のための取り組みや茨大生の印象について話を聞きました。

茨城大学水戸キャンパス正門から徒歩3分のところにある「茨城交通本社」は、茨城県内を中心に主に路線バスを運行する会社です。昭和19年の設立以来、地域の足として多くの人に利用され、特に茨城大学周辺を走る路線は学生の通学に欠かせない交通手段として親しまれています。

茨城交通では茨大の学生を支援する取り組みも行っています。その一例が、茨城大学水戸キャンパスの授業時間に合わせたダイヤ調整と新ルートの導入です。最近導入された赤塚駅始発の「赤塚駅（北口）→堀原小学校前→茨大前営業所」のルートは、所要時間約15分。既存ルートより短くなっています。また、茨城大学の学期に合わせた割引定期券も事務所やWebで販売しています。

茨大の学生に関する印象としては、運転手の方が「降りるときに『ありがとう』と言ってくれるのが嬉しい」と話してくれました。お金を払う立場である学生から感謝の言葉があることに驚きと喜びを感じるとのことです。また、以前、茨大の学生サークルがバスに不慣れな新入生のために「乗り方ガイド」を作成していたというエピソードも聞くことができました。

「バスに乗って行けるおすすめの場所は？」と質問すると、「たくさんあるので悩みますね」と笑いながらも、厳選して2ヵ所を紹介してくれました。

一つ目は、イオンモール水戸内原。茨大前営業所から土日限定で直通便が出ています。二つ目は「御前山（ごぜんやま）」です。「おまえやま」と読まれることがあり困惑すると笑いながら語ってくれました。ここは関東でも有数の自然豊かな地で、温泉や道の駅などの観光施設も近くにあるそうです。皆さん、ちょっとした旅にも茨城交通を利用してみてはいかがでしょうか。

上）茨大の近くにある本社はターミナルも兼ねていて、出発の前のバスが並んでいます。
下左）お話を聞かせてくれた本社の皆さん。左から松島さん、黒田さん、岡山さん。
下右）現在運行しているバスの8割弱が乗り降りしやすいノンステップバス。

本場中国料理と楽しい交流の場を提供！

木蘭酒家（もくらんしゅか）

SHOP DATA　茨城県水戸市末広町3丁目2-34／17:00～23:00・月曜定休

本場中国料理とお酒を提供する木蘭酒家の店長「しんちゃん」に取材しました。

茨城交通バス停保和苑入口から徒歩1分程度のところにある「木蘭酒家」は、本場中国の味を楽しめる店です。アットホームな雰囲気も魅力で茨大生のゼミの懇親会もよく開かれます。日本人のほかタイ人、ベトナム人などさまざまな国籍の人が訪れ、国際交流の場にもなっています。

木蘭酒家という名前は店長の「しんちゃん」がディズニーのキャラクター、ムーラン（花木蘭）のようにかっこいい女性になりたいという思いからつけたそうです。

しんちゃんは、留学生として中国から来日し日本語学校を経て日本の大学を卒業。その後飲食店勤務を経験し、留学生みらい会議の支援を受けて2023年5月に木蘭酒家をオープン。「ひとりではここまでやってこれなかった」と、これまでを支えてくれた人たちに感謝の気持ちを語ります。

店では中国文化に興味を持ってもらいたいとの思いのもと、中国の伝統的なひまわりの種の早食い競争なども行っています。こうした交流を通して、「一人でできることは少ないけれど、せめてこの店の中では国籍は関係なく日本人も中国人も尊敬しあって楽しんでもらえたらいい」と、日中関係改善への思いも聞くことができました。

しんちゃんは、この店でしか食べられない中国料理を大切にしているため、日本人向けに味を調整することなく料理を提供しています。特にお勧めの品は、辛めのもつ煮込みと中国の海鮮醤油ベースのチャーハン、ピリ辛の豚耳。どれもお酒に合うように濃いめの味付けにしているそうです。

店員さんとお客さんの関係を超えた友達のような存在のようなしんちゃん。本場の中国料理を味わってみたい方や進路や生活の悩みを相談してみたい留学生の方など、ぜひ一度木蘭に足を運んでみてください！

上）木蘭酒家の店内。中国にちなんださまざまな絵画や置物が飾られ、現地の店のよう。
下左）「ひまわりの種の早食い対戦」の掲示。いくつかの挑戦方法があります。参加無料で勝者にはプレゼントも。下右）明るい笑顔がトレードマーク。店主のしんちゃん。

取材・文：増田夕奈（人文社会科学部2年）、城戸麻稀（人文社会科学部1年）、大貫智洋（工学部1年）、井上桃歌（人文社会科学部2年）、下留梨瑚（人文社会科学部2年）

ちょっと 先生、いいですか？

～茨大教員の素顔を調査！～

Honami Igarashi　Tomohiro Onuki　Remi Ota

茨大教員約600人の中には意外な趣味や特技を持つ人物が…?!

大学は小中高と比べると一人ひとりの先生と関わる時間が少ないと感じている人もいるかもしれません。このコーナーでは茨大の先生たちに、自身の学生時代の話や趣味、学生への向き合い方などについて聞き、先生たちの「素顔」をお伝えしています。皆さんと先生との距離を縮めるきっかけにしてもらえればと思います！

世界を眺めて人生を豊かに 教科書は大人が読んでも面白い。

教育学部
伊藤 孝 教授

地学が専門で、日本列島の不思議や質問への丁寧な解説が人気の伊藤先生。還暦のお祝いに奥さまから贈られた真っ赤なTシャツ姿で、学びの面白さを語りました。

先生は普段どのように過ごされていますか。

最近は地図帳や年表を眺めながら家でゆっくりお酒を飲むことが楽しみです。学生時代使っていたものや自分で新たに買ったものを床いっぱいに広げて眺めていると、学生の時には気づかなかったことを発見することも。例えば中緯度地域には日本のような大きな島はなかなかなくて、日本って変わっているんだな、とか。そういう面白い気づきがあったときにはその場所をGoogleマップにピン留めしたり、奥さんに話したりするのですが、冷たくあしらわれています（笑）。

大人になってから昔使っていた教科書を読むことにはどんな魅力があるのですか？

大人になってから読んでみると、結構面白いんですよ。関ヶ原の合戦を例にすると、普通に勉強するときには合戦現場の地質図なんて見ないと思います。この山は何岩でできているかとか。入試には出ませんが、自分が興味を持っていることとつながったりするんです。そうやって分野を越えたつながりに気づけると面白いですね。

海外にもよく行かれると聞きました。日本とはかなり地形が違ったりするのですか？

良し悪しではなく、同じものもあれば違うものもあります。日本では流れる溶岩ってなかなか無いけれど、ハワイ島では普段から見ることができる。海外から日本に戻ってきてみると、日本が持つ世界と違うところに気がついて驚く。行った時の発見、戻った時の発見がそれぞれあるから、旅行って二度楽しめるんです。

学生に向けてメッセージをお願いします。

60歳を過ぎて思うのは、手を抜いてやったことは何の役にも立っていないということです。本気でやったことだけが自分の中に残っている気がします。一方で、学生さんは私の授業の内容よりちらっと言ったことのほうを覚えていたりするから、人生何事も計算できないところが面白いのだと思います。

過去に研究で訪れた場所や日々の気づきを記録したマップ。膨大な数のピンが所狭しとひしめいています。

異文化理解にVRを活用！ ラオスで気づいた “価値観の違い”

グローバルエンゲージメントセンター
胡 安琪（フ アン チイ） 助教

外国人とのコミュニケーションについて研究する胡先生。訪日外国人が過去最多を記録する今、留学の必要性や面白さ、外国人に対する偏見の減らし方について聞いてきました。

多くの外国人が日本に訪れ日本にいながら外国人と触れ合うことがある程度できる今、留学は必要でしょうか？

留学に興味があるならぜひおすすめします。日本国内で海外の方と関わるのと、自分が海外に行くのとでは全然違います。日本に来る外国人はある程度日本に関心を持っていますが、自分から海外に行くとなると、現地の空気感や価値観の違いに驚きます。そんな環境で生活を送ると楽しいことも苦しいことも経験して、言語能力だけではなくコミュニケーション能力そのものが上がります。短期でも長期でも行ってみると人生の財産になると思いますよ。

外国人が持つ日本人への偏見を減らすためにはどういったことが大事だと思われますか？

このテーマ、まさに私の研究分野なんですよ。普段目にしない事ってどうしても不安感を抱いてしまいます。その不安感を軽減するために、実際に外国人に出会う前にVRのコンテンツを使用し、友好的な交流を擬似体験するアプローチを開発しています。また、最近ではSNSの情報に振り回されすぎないことも大切です。SNSでは過剰に批判的な声もあるので、すべてを信じてしまうと友達になれたかもしれない相手とのチャンスを逃してしまいます。自分からオープンに接して、自分で経験してみることが大切だと思います。

先生にとって、異文化交流で一番記憶に残っている体験を教えてください。

大学時代に、研修でラオスを訪れました。ラオスの人たちは家族や仲間と一緒に過ごす時間をとても大事にしています。国の発展よりも、家族や仲間と過ごす時間を優先するという国民性なんですね。当時の私は課題に追われていて、現地のメンバーとのご飯を断ってしまったのですが、すごく怒られました。私たち日本人とは異なるその価値観に驚いたと同時に、その考え方はとても大事だと感じたことを今でもよく覚えています。

ブルネイ短期留学の引率の際に訪れたというモスク

取材・文：五十嵐穂南（人文社会科学部1年）、大貫智洋（工学部1年）、太田玲美（人文社会科学部2年）

茨大関連施設にDIVE!

茨大のさまざまな関連施設を学生視点でレポート！

茨大広報学生プロジェクトについて知りたい方はこちら！

IU.PR.GAKUSEIPJ

県内各地に所在する茨大の各キャンパスや関連施設の様子を学生視点からお届けします！第5回は阿見キャンパスに隣接する茨城大学農学部附属国際フィールド農学センターへ潜入。佐藤達雄教授の案内のもと調査してきました！

Sonosuke Seto　Maki Kido

キャンパスに隣接する広大な農場で得る多様な学び。

茨城大学農学部附属 国際フィールド農学センター

DATA　茨城県稲敷郡阿見町阿見4668-1

▲広大な農場を持つ農学センター。▶施設を案内してくれた佐藤教授。

茨城大学農学部附属国際フィールド農学センターは、大学附属農場としては珍しくキャンパスに隣接した農場です。学生は移動の手間なく、日々の授業として農作業を体験でき、学びと実践を両立しやすい環境が整っています。2年次には田植えや収穫、家畜の世話などの基礎的な実習を通じて、農業の大変さや自然との向き合い方を学びます。

手作業での農業に加え、無人田植え機やドローンなど最新のスマート農業技術を活用した実習もあり、未来の農業を支える技術と知識の理解を深めていきます。特に、トラクターの操作やGPSによる自動走行システムの体験などは、座学だけでは得られないリアルな学びとなっています。

3年次以降は、所属する学科やコースに応じて、より専門的に学びます。また、センターでは農業の安全性と持続可能性に関わる国際認証であるアジアGAP（Asia Good Agricultural Practice）の認証を取得しており、学生たちは実習中にも厳しい基準を守りながら作業を行います。農薬や衛生管理だけでなく、働く人のストレスに配慮する姿勢など、世界基準の農業への理解も養われます。

授業における農業機械メーカーや地元農家などとの地域連携や、教育学部と協力して行った歴史学習（太閤検地）など多分野とのつながりも魅力のひとつです。農業を軸に、教育・研究・地域・国際の架け橋となるこのセンターは、多様な学びの可能性にあふれています。

◀センター内の加工場。ここでカカオ豆がさまざまな加工を経てチョコレートになります。▼チョコレートのパッケージデザイン。カカオの実を模した目を引くデザイン。

インドネシアのカカオを仕入れて本格チョコレート製造に挑戦中！

皆さんも日常でよく口にするであろうチョコレート。その作り方をご存じでしょうか？ カカオ豆を発酵させて、ローストして、粉砕して……と、完成までにすごく手のかかる食べ物なんです。そんな手間のかかるチョコレートを作るプロジェクトが、なんとこのセンター内で進行中！ カカオ豆は、iOP（internship Off-campus Program）などで学生が栽培や加工を学んだインドネシアのカカオ農園で収穫されたものをおもに使っています。

届いたカカオ豆を加工する過程で、チョコレートの温度を調整する「テンパリング」と呼ばれる作業があるのですが、これが非常に難しくとても繊細な操作が必要なため、水戸のチョコレート専門店「DALMAISON」さんに指導を仰いで行ったそうです。そんな苦労が詰まった試作チョコレートを、取材した我々も味見させていただきました。口に入れてみると控えめな甘さとほのかな酸味が口いっぱいにひろがり、飲み込んだ後もフルーティーなカカオ豆の香りが残り、非常に美味しいチョコレートができあがっていました。取材時には、この試作品を基にDALMAISONさんで製品化してもらったチョコレートを11月の茨苑祭に出品する準備の真っ最中でした。作り手の想いがつまったこの希少なチョコレート、味わえた人は私たちと同じように幸せを感じたに違いありません。

◀出荷される前の牛。美しい毛並みで、非常に元気がありました。評価が待ち遠しいですね。取材前日に生まれた牛への名付けもさせてもらいました。

仔牛を育てて肥育農家へ出荷。一昨年は県内市場で最高評価を獲得。

大学附属農場では、学生の実習や研究のために牛が飼育されています。実はここで育てられている牛は県内での評価が高く非常に人気があります。農場では主に肉用牛を飼育していますが、そのほとんどは仔牛生産に使われる繁殖牛という牛です。繁殖牛は毎年仔牛を産み育ててくれるお母さん牛ですが、その仔牛は一般的に10カ月くらいで市場に出荷されます。

出荷された仔牛はセリで肥育農家に購入され、その後20カ月くらいかけて大きくされます。この大学農場の仔牛は、特に育てやすさやお肉になったときの成績と言った点から県内でも有数の高評価を受けており、多くの肥育農家からの需要があるそうです。

一昨年の茨城県内の家畜市場ではこの農場の仔牛がダントツの最高値を付けたこともありました。その裏では多くの工夫が施されていて、データでの管理を試みたり、放牧地を工夫してよい状態で確保していたりと、大学附属の農場ゆえの制限がある中でも試行を重ね、考え抜かれた方法で飼育されています。取材した日も多くの牛が放牧されており、農場内では元気のよい鳴き声が聞こえていました。出産直後の牛も非常に穏やかで飼育の丁寧さが伺えました。

取材・文：瀬戸草之介（人文社会科学部4年）、城戸麻稀（人文社会科学部1年）

Relay Essay

つながるイバダイバーズ

茨城大学の職員たちが、リレー形式で執筆するコラムです。

第5回 | 学務部国際連携教育課 **加藤 倫美**

異文化の中で暮らす“ざらつき”や痛みの感覚。知らなさを克服し人生を少し豊かにできる大学に。

学内外で初対面の方とお話しすると、「あれ、日本の方なんですね」と驚かれることがあります。はい、わたくし、博多生まれの日本人でございます。いくつかの部署を経て、現在はグローバル教育サポート室というところで国費外国人留学生の受け入れやチューター制度の運用事務等を担当しています。明るい部署で毎日笑いが絶えませんが、ちゃんと働いていますよ。

日本では観光案内所で英語パンフレットを渡されてしまいがちな私も、自分が東洋人であることを強烈に自覚した時期がありました。2019年から4年間のロンドン在住中のことです。この時期の英国はBREXIT、新型コロナウイルスパンデミックとロックダウン、女王崩御、二度の政権交代と、歴史的激動の最中にありました。住民の約4割が海外出生者であるインクルーシブな国際都市ロンドンにおいても、私は多様性の一角として受容されることの喜びと、マイノリティとして存在することの厳しさの両方を経験しました。異文化の中に暮らすということは、愉快な刺激だけでなく、無意識のうちに自分の中に醸成された価値観や思想が周囲との摩擦によってざらつきを帯びるような感覚を絶えず味わうことでもあります。本学で学ぶ外国人留学生の皆さんも、海外留学中の日本人学生の皆さんも、今まさにご経験されていることでしょう。

でもこの摩擦は海外に限った現象ではなく、日本国内においても地域社会においても、本当は日常的に経験していることなのですよね。私は茨城のことを、窓口にいらした学生さんのことを、隣にいる同僚のことを、どれだけ理解できているでしょうか。あらゆる場所に私のまだ認識できていない痛みがあり、それを克服すべく編み出された知恵があり、他者から学べることは限りありません。

さまざまな背景をもった学生が、教職員が、地域の方々が交差し、議論し、互いの無知領域を幾ばくかでも埋め、人生を少し豊かにして帰る。大学はそんな美しい機能もある場所です。国際理解・国際交流を推進するのは我々のミッションの一つではありますが、「国際」の冠に囚われず皆様の相互理解に寄与できるような仕事ができたら…と願っています。

どこかでお会いすることがありましたら、ぜひお喋りしましょう。私の知らないあなたの世界のことを教えてください。

PROFILE

加藤 倫美（かとう ともみ）

福岡県出身。大阪大学卒。学務部国際連携教育課（スチューデントサクセスセンター（SSC）グローバル教育サポート室）。趣味は古典芸能鑑賞

IBADAI News Update

茨城大学の最新トピックをお届けします！

図書館に宿った絶滅危惧種のコシアカツバメたち

腰に赤茶色の模様が入るコシアカツバメととっくり型の巣

水戸キャンパスの中心にある図書館本館前では、夏になるとツバメたちが元気に飛び交う姿が見られます。複数のアーチが並ぶ外廊の天井にはツバメたちの巣がひとつ、ふたつ、みっつ……実は年々増えており、今ではまるで団地のようです。チ、チという雛のかわいらしい声に癒されながらも、ツバメたちが落とすフンの汚れは、特に図書館で働くスタッフにとっては悩みの種でもあります。

今年（2025年）の7月、オープンキャンパスを前に大人数でフンの掃除にとりかかった日の夜、生物系が専門のある教員からメールが届きました。

「もしかしたら、あれはコシアカツバメかもしれません」

普段は別の地区に勤めているその教員は、その日たまたま水戸キャンパスを訪れていて、その際に図書館のツバメたちを目にしたようです。紹介された「ツバメの種類の見分け方」というサイトによると、コシアカツバメは一般のツバメよりも大きく、名前のとおり腰部分に赤茶色の模様が見られます。巣の形も特徴的で、よく見るツバメの巣が「おわん型」なのに対し、コシアカツバメの巣は入口が狭まった「とっくり型」だそうです。図書館で年々数を増やしている巣も、まさにとっくり型でした。そして羽を広げて飛ぶツバメたちは、確かに腰あたりに赤い色を覗かせています。

そしてこのコシアカツバメ、「茨城における絶滅のおそれのある野生生物 2016年改訂版」（茨城県版レッドデータブック）によれば、「2004（平成16）年の環境省調査で県北の分布が20年前に比べ激減し、その状況が現在も継続している」ということで、絶滅の危険が増大している「絶滅危惧II類」に指定されているのです。

コシアカツバメは、大学のキャンパスや公共ホールのような大きな建物にたくさんの巣をつくる習性があります。フンを落とす厄介者ではあっても、地域の生物多様性を伝えてくれる希少な存在なのです。このことに多くの人に興味を持ってもらおうと、広報・アウトリーチ支援室では、コシアカツバメの生態を紹介するポスターを急遽作成しました。

この記事がみなさんの手元に届く秋から冬にかけては、コシアカツバメたちの団地はみんな空き家になっています。地球上のどこかの温暖な場所で元気に過ごしているでしょうか。「サステイナビリティ学」を掲げる茨城大学として、コシアカツバメたちの生態を長く見守っていきたいと心に誓いながら、次の夏の来訪を待っています。

コシアカツバメの生態を知らせるポスターを作成

EDITOR'S NOTE

▶専門も立場も異なる皆さんの言葉が並びました。それぞれの視点から広がる世界をのぞいてみてください。語りぶりも考え方も違うけれど、底の方でつながっているように見える。そこに大学の奥深さを感じました。まだまだ潜れそうです。（広報・アウトリーチ支援室 岡田佳那子） ▶ディプロマ・ポリシーの「世界の俯瞰的理解」と岡倉天心をつなぐ企画、実はずっと温めていました。茨城大学五浦美術文化研究所70年の節目にこの特集ができてよかった！（同 山崎一希） ▶茨大広報学生プロジェクトの太田です。今号は、暑い暑い夏休みの中で、テーマ決定・取材・執筆に取り組みました。完成した学生ページを見ていると、「自分が知りたかったことを他の人にも伝える」という同じ楽しさを、他のメンバーも感じているのがわかってワクワクします。自分たちが関わった文章をたくさんの方に読んでいただける機会を学生ながらにいただけたことに、感謝の気持ちでいっぱいです！ 取材にご協力くださった皆様、ありがとうございました。（茨大広報学生プロジェクト 太田玲美） ▶岡倉天心の時代からはるか未来への展望まで、時空を行き交うような感覚を抱きながら編集補佐を務めることができました。大学の懐の深さに圧倒された時間となりました。（編集・笠井峰子）

広報紙「IBADAIVERS（イバダイバーズ）」は、茨城大学ホームページからもご覧いただけます。

紙面アンケートを実施しています。感想や次号で取り上げてほしい内容など、ご意見をお寄せください。

茨城大学広報紙「IBADAIVERS（イバダイバーズ）」vol.5／発行日：2025年11月28日／発行：茨城大学広報・アウトリーチ支援室 〒310-8512 茨城県水戸市文京2丁目1番1号 TEL：029-228-8008／編集協力：笠井編集室 デザイン：vangraphics
koho-prg@ml.ibaraki.ac.jp www.ibaraki.ac.jp ibadai.mito @IBADAI_official ibaraki_univ ibadaimovie @ibadai_official